

---

# TIME ~ 忘れられたものの話 ~

水花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TIME〜忘れられたもの話〜

### 【Nコード】

N0156T

### 【作者名】

水花

### 【あらすじ】

目隠しをされて連れて行かれた先は・・・

サイトより転載作品

目隠しをされて乗り物に積まれて、ごとごと揺られて。  
とても長い時間が過ぎたように思う。

いきなり目隠しを外されても、飛び込んできた光があまりに眩しくて、すぐにきつく目を閉じてしまった。

だから、どんなところに自分が居るかなんて、少しもわからない。  
音が違う、空気が違う・・・匂いが違う。

何もかも違う、知らない場所。

声だけが聞こえてきた。知らない誰かの声。

「どうでしょう。今はもう、なかなか手に入るもんじゃありませんよ」

「そうですね・・・」

片方の声は思案するように沈黙する。あまりに静かなのは苦手だ。  
かといって、うるさいのが好きなわけじゃ、ないけれど。

「うん、それじゃあ、もううことにします」

「ありがとうございます！」

片方の声は、弾むように答えた。ちゃりん、と金属が落ちる音、  
そしてかさこそという紙が擦れる音が聞こえた。

ここは何処なんだろう？

心細さで胸が一杯になる。瞬きを繰り返してもまだ何も見えてこなくて、とても不安だった。

「それじゃ、また何かいい物があつたら連絡しますよ」

扉の開く音と閉まる音、そしてちりりんと澄んだ鈴の音が聞こえて・・・そうして静かになった。

その頃になつて、ようやく目が慣れてきた。

きよろきよろと辺りを見回すと、やはり全然知らない場所だった。  
少しのテーブルと椅子、そしてお茶の香りがする。

長いこといた、あのお気に入りの場所じゃ、なかった。

泣きそうになって呟いた。

「ここ、どこなの・・・」

みんなどこに行ったの。そばでお茶を飲んで、楽しそうに笑っていたひとたちは。

わたしはどこにいるの・・・一人きりで。

「おや、気がついたようですね」

やわらかな声がかけれ、飛び上がりそうなほど驚いた。自分の声が聞こえるなんて、思わなかったから。

少しためらった後・・・うん、と小さく頷いてから、尋ねた。何故自分が此処に居るかを。

この人なら、自分がここに居る理由を、知っていそうな気がしたから。

「わたし、なんでここに居るの・・・？」

柔らかな声の持ち主は、穏やかな秋の日差しのような笑みを浮かべて答えをくれた。

「きみのもと居た所ではね、いままでの習慣を止めて、他の街と同じような・・・を使うことになったんです」

驚きに声も出なくなった。そんな話ちつとも知らなかった。じゃあ、自分は要らなくなったの？

じわりと涙が浮かびそうになる。穏やかな空間の、一部であり続けるんだと・・・そう思っていたのに。

穏やかな声の主は、温かな指先で優しく頭を撫でてくれた。

「そして、きみの持ち主は街を越したと聞いています。でも、きみは捨てられたわけじゃないですよ。きっと、一緒には連れてゆけない理由があったんでしょう」

きみは大事にされてきたようですね。だいいち、傷一つありませんから。

声の主は、泣きそうな子どもを安心させるような声で言う。

理由。すぐに思い当たるものはあった。多分、自分のこの体が大きいせいだ。だから一度決められた場所からは、動くことが出来な

かった。

置いてゆかれた事は悲しくて、今でも一緒に行きたかったのにと  
思ってしまうが、同時に仕方ないことだとも判っている。もう会え  
ない人たち、二度と戻れない場所へ心の中でさよならを言った。

「長旅で疲れたでしょう。少しお休みなさい」

そういわれると、確かに揺られ続けていて、体がとても重かった。  
ここがどんな場所か・・・まだよくわからないけれど、この優しい  
声の主と居られるならきつと安心できる、そう思って目を閉じた。  
いくらもしないうちに、眠りの波が襲ってきて・・・その波に体  
を委ねたのだ。

喫茶店の店主は、その様子をじっと見ていた。

時計の針が、次第に止まってゆく有様を。

古い型の時計、日月の運行に合わせた時を刻む、特殊な型の時計。  
今は殆どの場所で使われなくなった時計が、しずかに眠っていく様  
子を。

穏やかな目で見守っていた。

今はこの時計が使われていた街でも、世界共通の時を刻む時計が、  
時を告げていることだろう。

めぐる季節に関係なく、ただ機械的に割り振られた時を・・・淀  
むことなく正確に。

この時計は、その街では役目を終えたのだ。

いとおしむように、店主は時計を撫で、言った。  
とてもやさしい声で。

「おつかれさま、ゆっくりおやすみ」

E  
N  
D

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0156t/>

---

TIME～忘れられたものの話～

2011年10月9日01時01分発行